

## 14. 風戸の祭の変遷と日付変更

榎 戸 蓉 子

- I. はじめに
- II. 風戸の祭
- III. 祭の変遷
- IV. 日付変更とその理由
- V. 考察
- VI. おわりに

### I. は じ め に

私の記憶の最も古いものの1つに、祖父母の住む石川県津幡町での祭の風景がある。祭の日は目を覚ますと太鼓や笛の音が遠くから聞こえてくる。お囃子はだんだん近づき、巨大な獅子が道いっぱいに暴れ回り、襲いかかる。そして祭は目の前を通りすぎていく。この原風景をもって成長した私に、風戸の人々は熱く祭を語る。目の前を通りすぎていった祭を今度は追いかけてみたい。私が祭に興味をもった理由はこういうものであった。

祭はその土地の神を奉り、人々の生活の安全を願ったり、自然に対する感謝や畏怖を表現したり、また子孫繁栄を願った若い男女の公式な出会いの場であったりした。祭は土地の人々のアイデンティティの在処ともなり、「たびのひと」には立入ることのできない部分である。風戸の人々にとってもそれは同様で、多くの住民によって祭が語られ、風戸の社会生活にとって祭は不可欠のように思う。それ故に、祭の変化について調査することは現在の風戸の状況を最も端的に表わすものではないかと思う。

現在社会では情報が氾濫し、産業構造の変化にともなって価値観の変容、再構成が起こっている。このような大きな社会変化は風戸にも無関係ではありえず、現に能登地方の多くの地域が抱えている問題である、若者の流出、住民の高齢化に直面し、なんらかの選択を迫られていると言ってもよい。

本稿では祭を通して、このような現在の風戸が直面する問題を浮き彫りにできればと思う。以下では、重要な祭事である夏季大祭が時代の変遷とともに姿を変えた様子を述べ、更に祭の日付が変更したことに注目して、風戸の現況とそのような状況になるに至った過程を明らかにしたいと思う。

## Ⅱ. 風 戸 の 祭

風戸の祭は大通りである県道深谷・中浜線から海のほうへ一本路地を降りた所にある松ケ下神社を中心に行なわれる。斜面に階段状に住居が並ぶこの区では、他と同様に神社からも海を望むことができる。風戸区全体から見ると神社は区を中心部に位置するが、富来漁港や西海漁協を見下ろす1班に比較的新しい住居が多く、分家である新宅が多いことからすると、かつては、神社は区の東端に位置していたのではないかと思う。本殿は南西に向かって開けているが、東端に位置していたとすると神社の正面は区を中心のほうを向いていたことになる。

神社の起源については、それを明確に記憶する人物はおらず、また資料も少ないことからはっきりとはしないが、鳥居に弘化2（1845）年に寄贈されたと刻印されていることから今からおよそ150年前にはすでに存在していたことが明らかである。記録によると、明治40年代に改称、改築されていて、現在に続く形になったと思われる（『富来町史・資料編』p.688-689）。また鳥居や狛犬などの寄贈は戦前にエトロフ・樺太島など北方遠洋漁業で成功した風戸出身の人物が地元で財を還元したものである。

年に行なわれる祭事は、まず元旦に神社で祝詞を捧げる元旦祭で、区の役員のほか、厄年にあたる人は厄払いをしてもらうそうである。また春式は4月16日、秋式は11月16日に行なわれる。いずれも神社に区三役をはじめ、組長、氏子総代や有志が集まり祝詞をあげるといった簡素な神事である。かつてはこの神事に合わせて各戸で餅や赤飯を食べたりしたそうだが、現在では区の役員などにならない限りは参加することもないようだ。

これらの神事には区の役員が出席するが、神社に関しての役職は、神社役員、氏子総代、宮番の3つが挙げられる。神社役員は神社の名義となっている山<sup>21</sup>などの区有財産の管理が任務で任期は3年、3名が任命されている。氏子総代は風戸全戸の氏子の代表であり、祭事における代表でもある。宮番は組長から選出され、神事における準備や作業を取り仕切り、また神社の日常的な点検や見回りなどもしている。

また漁に携わる人は験を担ぐ意味で初詣でに行ったり、10月20日には恵比須祭、2月11日には起舟祭を行なう。初詣では松ケ下神社のほかに羽咋市の気多大社に参詣する区民もいる。恵比須祭と起舟祭はいずれも船主ごとに豊漁を祈願するもので、現在では恵比須祭では船主主催で宴が催され、起舟祭も同様に漁協が主催する神事である。かつては起舟祭が行なわれるまで冬は船を出さなかったというが、現在では簡素化される傾向で、「輪島のほうでは盛んらしいけど、（風戸の）漁師はあまり神仏に祈るといことはしない」（70歳代男性）という人もいる。

ここまで見ると、日常的な参詣はあまり盛んには行われていないようだ。しかし、神社の清掃はたびたび行なわれている。風戸区定期初総会議案書の行事計画によると、4月の春式、8月の夏季大祭、11月の秋式の前に、また年末年始の準備作業と称して神社・境内の清掃がされ

ている。この他に、道路や区内の清掃は5月と10月に大掃除として行なわれている。これらの清掃は「お仲仕事」と呼ばれて、基本的に全戸から1名が参加することになる。参加できないときは1戸につき3,000円が、半日参加の時は1,500円が賦課される。かつては町役場から清掃が徹底しているか巡回して、点検証が表札の横に貼られたというが、1997年からは区が点検を担当している。

風戸の祭は夏季大祭と呼ばれる<sup>3)</sup>。上で述べたような神事に比べ、区としての一大イベントと言え、1年に一度神社が主役になる日である。宗教行事が盛んに行なわれているとは言えないこの風戸で祭はどのような意味を持つのだろうか。

神社には海の神様である恵比須様や金比羅様が奉ってある。典型的な漁村であり、海を目前にして暮らす人々にとって、風戸の祭は海上安全・豊漁を祈願する神事である。しかし近海で零細漁業を営んでいた風戸区民にとって祭は海上安全・豊漁祈願という性格よりむしろ、厳しい自然環境や社会的規範に対しての、村をあげての娯楽の性格が強かったのであろう。それは現在でも宗教儀礼としてより、「祭は年に一度の無礼講」の意識が区民に強いことに現れている。

### Ⅲ. 祭 の 変 遷

この節では風戸の祭が現在までにさまざまな変貌を遂げたその種々の変化の様子を前半に述べたい。なお、本稿ではその時間の契機を第2次大戦直後あたりにおいている。それ以前のは資料もなく、聞き取りでも情報が十分に得られなかったからである。

#### 1. 形式の変化

現在の風戸の祭の概要については15章で述べてあるので以下では繰り返さないが、この項では祭の形式の変化についていくつか述べる。

風戸は風無という風戸よりも規模の大きな区と隣接する。風戸の祭はこの風無と同日に行なわれる。風戸の神様は女神で、風無は男神であると言われ、かつては双方が神様をそれぞれの地区に招待しあっていた。1年毎に、風戸側からは現在は西海保育所のある風無の旧西海小学校の校庭へ、風無側からは松ヶ下神社へ神輿やキリコが移動した。それぞれ招待しあった先で祭は最高潮になるわけだが、毎年必ずなんらかのイザコザが発生したそうである。この神様同士の招待はそのケンカが原因ともなって1950年代頃になくなった。

そのかわり祭のハイライトとなったのは、やはり風無との境界となる道での双方の神輿やキリコの接触である。境界線である海岸沿いの道へ降りる順番は決まっていたが、それぞれの神輿やキリコを誇示しあって盛り上がる。また現在では1985（昭和60）年に新築された西海小学校へ続く新道が以前の境界線から山のほうへ延び、その道幅の広い新道でハイライトのパフォ

ーマンスが繰りひろげられるようになった。

祭では松ヶ下神社を出るとまず西海漁協へ向かう。西海漁協に着くと漁協内で神主が祝詞をあげる神事が行なわれる。これは神様をイエに招く「御招待」と呼ばれる儀式である。この御招待は結婚や祝い事のあったイエや商売繁盛したイエが縁起を担ぐ意味で行なっていたもので、毎年2軒くらいは希望していたそうである。御招待では家の中まで神輿が入り神事を行ない、料理が振舞われたそうである。経費も相当かかり、祭の行列は1時間ほど中断した。御招待をした次の年にそのイエに良くないことが起こったり、経費がかかり非経済的であるといった理由で御招待は1960年代後半から一般の家ではあまりされないようになった<sup>4)</sup>。以前は昼間から御招待をしていたが、それがなくなったために祭の全体の時間は大幅に短縮されたという。

## 2. 道具・衣装の変化

祭の行列は神様の奉燈であるキリコ、長い竿の上に提灯が付いている高張、前後で数人が担ぐ太鼓と鐘、そして神輿から成っている。

風戸の祭は午後6時から深夜にかけて行なわれるため、高張やキリコの灯は闇によく映える。この灯もかつてはろうそくを灯していたが、現在では高張やキリコの一部は電気で補っている。特にキリコはバッテリーを積んでいるのでかなりの重量がある。風戸では女性によって担がれるキリコが有名だが、女性の肩にはこたえるものだという。「ろうそくのほうが風情があってよかった」というのはよく聞かれ、電力化によって重量が増え、結果として台車でキリコを引くようになっては情けないという人もいた。このキリコは最近では1983年に新調されたものがあるが輪島塗や蒔絵が施され年々豪華になっているという。新調や修復にかかる費用は祭万雑<sup>5)</sup>のなかから出される。

衣装で特に目が行くのは女性の真赤なおこしである。このおこしはかつては未婚者は赤、既婚者は桃色、子供が成長するくらいには水色と区別されていて、このおこしの色で男性が未婚者を識別していたというが、現在では未婚・既婚を問わずほぼ全員が赤で統一している。その理由としては「鮮やかな赤のほうが見栄えが良いため全員が赤を着用するようになった」と言われる。

女性の祭参加は風戸の祭の特徴のように言われる。かつて漁や航海で不在気味だった男性に換わって女性が積極的に祭に参加するようになったという経緯は理解できるし、大きな特徴とも言えるだろう。しかし石川県や加賀・能登の祭全般を紹介した書籍や雑誌に掲載される西海地区の祭の写真のほとんどが女性のキリコであり、そのなかでも風戸の祭は女性主体であるように紹介されることが多い。実際の祭で中心となっているのは壮年会、太鼓人足の男性であるにもかかわらず、このようなズレが生まれた経緯には祭の観光化が影響している。

能登の祭が郷愁漂うものとしてクローズアップされ、観光資源とされ、プロのカメラマンが

撮影をしに来るようになったのは1980年代頃からだそうだ。町行政のほうでも観光商工課によって、各地区の祭を観光資源としてPRするようになった。また1997年からは県でも全国的には知名度の低い能登の奉燈（キリコ）祭をPRして、観光客招致に乗り出した。そのような流れの中で、「風戸の祭＝女性」の単純なイメージが増幅されていったのだと思われる。

一方で住民からの聞き取りの中でも「女の人の祭は観光の面で辞めれん」という声がかつて聞かれた。先の「鮮やかな赤のほうが見栄えがいい」というのも「観光の面でね」と付け加えられることがあった。また富来町の商工会が主催する「いやさか祭」では、各区からいくつか出し物が出されるが、風戸では女性のキリコが要請された。このように風戸の祭が女性主体と紹介されるうちに、区民の中でもそのイメージが定着してしまったのだろう。しかし、当然それを額面どおり受容するのではなく、風戸の祭が観光資源であることを一般的に認識しつつ、女性の祭参加について風戸独自のものとして考えるきっかけになっているといえる。

女性の役割については12章で概観してあるが、祭に関しては女性の役割はなかば抽象的に強調され、「女性の『力』というものはすごい」（50歳代男性）というふうに言われる。伝統として受け継がれてきたという女性の祭参加において、漁村での女性の役割の延長としての側面は現実では形骸化しつつある。しかし現在でも、女性に関してその「力」が言及されるのは、風戸独自の慣習としての再認識という新たな意味が付け加えられたからではないだろうか。

### 3. 祭唄の変容

祭唄は民謡などをアレンジして、独自の節回しや歌詞をつけて唄われるもので古来から伝わるものだという。内容は男神と女神のことを唄うもので、エロティックなものが多い。かつてはエロティックなものも公然と唄われていたが、一時は教育上の問題や観光目的に適さないといった理由から唄われなくなった時期もあった。しかし最近では祭唄を復活させようという動きがあって、神輿が区内を周回した後、神社の境内に戻ってくる「ウチツキ」の際に、区の長老に正しい祭唄を唄ってもらい継承させようとしている。

以上のような種々の変化で特に目立つのは、祭を観光資源化する傾向である。富来町は江戸時代からその自然条件から風光明媚な観光地として知られていた（『富来町史・通史編』p548－553）。しかし、景観以外にキャンプ場や「ふるさと文化センター」などの施設を整備して、観光資源として利用し始めたのは1980年代に入ってから<sup>9)</sup>で、その余波が風戸の祭のいくつかの変化に影響したのだろう。例えば女性の衣装や祭唄の変化に関してその理由と言われるものは、「観光に良くない」とか「観光の面で」というような、暗に第三者の目を意識した、区民にとっては直接的ではない理由である。

しかしながら、このような変化は観光化の圧力に屈した結果ではなく、また区民で祭を観光目的と考える人はいない。現に「（風戸の祭に比べ）いやさか祭は観光目的のものやからおもしろ

ろくない」というように、風戸の祭は観光とは別格のものとしている。また風戸は区としての結束力が強く、自主性や独自性を重んじるような傾向<sup>7</sup>があり、区民は祭に誇りを感じている。区民にとって観光目的の祭とは観光客を対象にして洗練されたり、合理化されたりして、いわば外側に向かって変化したものである。これに対して風戸の祭は観光とは違う方向に向いていると考えられている。つまり区民は祭を本質的には観光目的と異なったものとしているが、風戸の祭の一部分（女性の祭参加、衣装やキリコの装飾、祭唄の衰退など）においては、観光を変化の理由づけにしているのである。このことから、区民に祭の観光資源化の流れがはっきりと意識されていることがわかる。それと同時に観光目的の祭と明確に線を引いて、風戸の祭の独自性を維持していこうとしているのではないだろうか。

#### IV. 日付変更とその理由

##### 1. 祭の日付の変遷

この項では風戸の祭が2度にわたってその日付を変更しているということに注目して、その通史的背景や変更に至った具体的手順などを述べたいと思う。

松ヶ下神社で行なわれる祭事はIIで述べた通りであるが、そのうちの春式と秋式がそれぞれ月の16日に行なわれている。夏季大祭も起源は同様に9月16日であったという。この16日というのは産土神である神社のなんらかの記念日であると推測される。

最初の変更はこの9月16日から9月1日に変更したことである。この最初の変更の具体的年号を記憶する人物には出会えなかったが、いくつかの情報のうち、9月1日に祭をしていた期間がだいたい30年間前後だということ、また「ここに嫁に来た当時（1961年）は9月16日に祭をしていた」（60歳代女性）などから1960年代の半ばに変更したのではないかと思われる。

この1960年代は高度成長期中頃で富来町全体では第1次産業従事者が減少し、第3次産業従事者が増加の傾向にあった。第3次産業従事者の増加は運輸業である船員の増加に支えられていた（『富来町史・通史編』p.521-526）。風戸でも船員は1戸に1人はいたと言われていて、現在でも元船員という人は多い（生業については1、10章参照）。

2度目の変更は1996年に行なわれた9月1日から8月14日への移動である。つまりごく最近であり、1997年は変更後2回目の祭となった。

風戸区の人口は1990年の国勢調査では400人を大幅に割り、高齢化もすすんでいる。高齢化の問題は13章で扱っているので割愛するが、就学就労のために高校を卒業すると町外に転出するパターンが多く、若者の都市への流出は顕著になって、過疎化に拍車をかけている（人口構成の詳細、高齢化については1、13章参照）。

祭の日付の最初の変更については記憶する人も少なく、また区民の祭についての発言は2度目の変更についてに集中していた。区民が2度目の変更について多くを語るのは、最近のこと

だけに当然と言えば当然だが、それだけ問題が意識されているとも想定できる。現在の風戸の祭は8月14日の盆に行なわれている。この盆という重要な仏教に基づく宗教行事が行なわれる時期に、同様に特別な祭事である祭が行なわれている。

風戸では祭の2、3週間前に臨時総会（祭総会）<sup>9)</sup>が毎年行なわれる。区長をはじめ区三役、壮年会会長らが進行して、祭に関する議案事項や準備、注意について協議する。1997年の祭総会では予算や祭万難の徴収の詳細、富来高校からの高校生の祭参加に対するプリントの配布、婦人会への祭参加への要請などであった。この際、祭に関する様々な意見が交換されたが、それは後に述べることにする。

また1996年の祭の日付変更に関しての具体的経緯を述べると、最初は富来町の各地区の区長らによる連合区長会で富来町全体での祭の日付変更が打診されたという。次に区に持ち帰ったその議案が区三役、組長、壮年会会長らを含めた風無と合同の緊急役員会で検討され、最後には風戸の祭総会で変更か否かを採決した。総会で表立った反対はなく、すんなりと合意したという。

## 2. 日付変更の理由

この項では風戸の人々が祭の日付変更についてどのように考え、どのように語っているかを述べていく。祭の日付変更に関しては様々な人によって多様な意見が語られたが、その理由についても一様ではなく、各人によって異なる理由づけがあるようだった。ここではそのような語りからその背景を考察して、祭の日付の変更が風戸にとってどのような意味を持つものかを見つめてみたいと思う。

### (1) 教育上の理由

なぜ祭の日程が変わったかという問いに対して「学校側の要望だ」とか「教育上の問題だ」という声があがった。このような意見は祭の日程が学校に在学する生徒に教育上の不都合を与えるものであるから、また在学中の生徒の祭への参加に関して学校側からなんらかの要望があったからそれが日付変更の理由になったというものである。つまり「2学期の始めである9月1日に祭があると、生徒に祭気分が消えず、けじめがつかない」、「生徒が学校から解放される夏休みに祭を行えば、新学期は勉強に集中できる」という理由である。実際夏休み明けに試験を予定していても、生徒はその晩に行なわれる祭に心踊って落ち着かず、試験に集中できないので試験を延期したことがあるという。

また「破目を外すようなことがあったから」という意見もあった。これは在学中の生徒が祭の際に飲酒や喫煙など風紀を乱すようなことをして、それが問題になり祭の日付変更につながったというものである。1997年の祭総会に私たちは参加させてもらったが、その総会では富来高校による地区祭礼への高校生の参加についてのプリントが配布された。そのプリントによる

と、そのような行動が過去、高校側の責任として問われる事態になったらしく、そのような事態の未然の防止のため、生徒の祭参加に対して許可制にするという規制がされている。

風戸では男性は中学校を卒業すると壮年会の下部組織である青年団に所属することになっていて、その年からさらしを巻いて神輿を担ぐことができる。近隣の地区に比べ壮年会員の少ない風戸では、若年でもすぐ神輿を担ぐことができ、同級生にうらやましがられたという（30歳代男性）。若者の都市への流出が進む風戸では、このような高校生は貴重な人足であると考えられる。

それに比べ女子高校生の参加は1984年以降、13年間全面禁止されていた。風戸では漁や航海にでる男性の代わりに女性が祭に積極的に参加する風習があり、このような女子高生の不参加は手痛いに違いない。区では毎年女子生徒の参加許可を申請していて、1997年からは男子生徒同様許可制に移行した<sup>9)</sup>。「いいときに祭に出なかったから祭の楽しさわからん」（30、60歳代男性）と言われるように、女子高校生の祭参加の規制は、高校卒業後その多くが転出してしまう時期とも重なり、女性の祭離れの傾向に拍車をかけたように考えられる。例の真赤なおこしも「若い女性が着てはじめて絵になる」と言われるが、現在の祭に参加する女性は「嫁」に依存しているといつてよい。

しかし以上から見ると、教育上の理由として挙げられるものは祭の日付変更の理由として決定的ではない。というのは確かに変更の発端や補助的理由とはなっているが、それがなぜ8月14日のお盆になったのかについては説明できていないからである。しかしながら、高校生の祭参加に関しては、「学校と教師に都合がいいだけ」（60歳代男性）、「学校では伝統を教えるくせに、祭に参加しちゃいかんと言う」（50歳代男性）というように学校社会への問題意識も見え隠れしている。

祭について、富来高校によるプリントでは「…あらゆるものの価値基準が見直されつつあるときに、ひとり『祭礼』のみが例外ではない。（中略）良い点を推進し、悪い点を除去し、本来の敬けんな宗教行事としての祭礼はどうあるべきか考えていくべきであろう」として、このような諸条件が満たされれば、学校による高校生の祭参加の規制は不必要になるとしている。風戸区のある西海地区では1964（昭和39）年に西海中学校が富来中学校に統合され<sup>10)</sup>、最近では卒業生の多くが富来高校へ進学する。中学校統合からの世代は祭運営の中心の世代になっている。区レベルでの祭に対する考え方に比べ、学校としての祭に対する対応は富来町全体に関わる問題となっている。高校生の祭参加に関連する問題は、また後でも述べることになる。

また同じプリントで、地域としての祭に関して「地区の祭礼は、地区の氏神（神社）に関わる伝統的宗教行事であって、（中略）学校、家庭、地域がそれぞれ果たすべき役割を（中略）明確に共通理解し、そのもとで青少年の健全育成に力を傾注すべきである」として地域としての祭の教育の場としての役割を喚起している。



学校社会では学校の都合が優先され、子供は学校教育の範疇で扱われる。このような学校社会では、学校としての祭に対する考え方は地域としての祭に対する考え方より優先されることになる。区民が教育上の問題を日付変更の理由として多く挙げるのはこのような学校社会を問題視していることの反映といえるだろう。区民にとって祭はあくまで地域としての祭であり、祭の自治は当然、区でされるべきなのである。

## (2) 八朔祭との関係から見る理由

八朔祭とは富木八幡神社を中心として富来町中心部で行なわれる規模の大きな祭礼である。風戸の祭の日付変更の理由として一番多かったのが「八朔祭と合わせて変更したんや」という八朔祭との関係を挙げたものである。八朔祭もやはり1996年に8月31日・9月1日から8月13・14日に日付変更している(八朔祭の詳細については7章参照)。この八朔祭の日付が変更したために風戸の祭も追随したというのだが、その背景には風戸ないし西海地区と領家、地頭など旧富来町中心部との関係性が見てとれる。

風戸は1954(昭和29)年に富来町として併合されるまで近隣の風無、千浦、久喜とともに西海村を構成していた。旧富来町とは領家、地頭など、1954年に周辺7ヶ村を併合される以前の町域を指す。そのうち八朔祭が行なわれる地区は旧東増穂村、旧富来町、旧稗造村のうちの15の区でかなり広範囲にまたがる。風戸に隣接するのは旧西増穂村であったが、隣接といっても、交通網が整備されるまでは、日常的な交流は盛んではなかったようである。70歳以上の女性でかつて魚売りを経験した人によると、「朝から砂浜沿いを何キロも歩いて行商にいった」という。彼女らの行き先は多くは大福寺など旧西増穂村の比較的近場であったが、時にはより遠くの旧富来町の地区へ行くこともあったという。

このように距離は離れていても祭の時には互いに行き来しあったらしく、50歳代男性らの記憶によると、「富来(旧富来町)から来た人にきれいな女性がちょっかいを出された」、「キリコが海に放り出された」、「富来から来たヤクザを皆で海に投げ出した」ことがあるという。このようなイザコザやケンカを回避するために祭を八朔祭と同日にしなければならなかった、というのが八朔祭との関係を日付変更の理由にする人の考えである。1997年の祭総会でも、改めて日付をどうするか問いに、先に述べた日付変更を協議した連合区長会での「八朔と一緒にせんなん責任とれん」という発言の例が提示され、地区同士の衝突の不安が日付変更の契機となったことが明確にされた。

それでも同じ席で「八朔と合わせるのではなく、区自身で考えるべきだ」という意見が出たり、「富来の商工会が客寄せのために変えたのに、それに金魚のフンみたいについていった」(60歳代男性)のように区の自主性に関して非難するような厳しい意見もあった。また「前はケンカもしたけど、今の子は顔見知りも多いしそんなことは起きん」というふうに、中学校が統合されてからは相互に往来があって、地区同士の隔たりがなくなり、同級生同士のヨコのつなが

りもあるのでケンカは起きないだろうといった冷静な意見もある。実際に風戸の中学・高校生の中には人足の足りない地区の八朔祭に参加する人もいたり、出身地区で区別することはないようである。

ただ、かつては地区同士の対抗といった図式で処理できた問題でも、現代ではまったく違った様相で表出している。例えば既述したように、学校が生徒の祭参加を禁止したり、飲酒や喫煙を殊更に問題視するのは、中学生や高校生特有の「荒れ」が社会問題化していることを反映した結果であることがわかる。このような中学、高校生の風紀の乱れは(1)で教育的問題としたが、区民の間では高校生の祭参加の問題と抱き合わせて、「無礼講」の問題としてあがってきている。この場合、「無礼講」は祭の「ハレ」の状態を示すものではなく、未成年者の飲酒・喫煙を含む無法状態を示す文脈で使われている。これまでに特定の生徒が祭で騒ぎを起こすような事件もあったが、これを特例とせず、むしろケンカなど風紀の乱れを懸念するきっかけとなったと仮定すると、地区同士の対抗意識だけでは説明しえない問題も見えてくる。

区民からの聞き取りで、風戸と八朔祭の行なわれる地区の関係性について言われることは、非日常の場でのケンカやイザコザのみでなく、「富来の祭(八朔祭)はいくつか集落が集まっての祭やから、地区の祭としては火が消えたよう」というものや、「八朔祭は人の多く集まる祭」、「観光目的の祭」というものであった。八朔祭は富来町中心部で、しかも広範囲で行なわれる規模が大きく、華やかな、そして富来町を代表する有名な祭である。一方で区民は風戸の祭をそれと対極にあるもののようにいう。つまり風戸の祭は「区の祭」であり、「観光を目的にしない祭」であり、区の単位で人が結集して行なわれる。区民の八朔祭、しいては富来町中心部を見る目は、行政や経済、教育などあらゆる面での中心に対する目である。区民は富来町中心部まで行って仕事をし、買い物をする。役場も病院も車がなくては不便である。区民は風戸を、中心に対する周辺地域として意識している。しかし、決して下位組織としてではなく、中心と相対化して、区の独自性を保つ、自立した存在として区を認識している。

### (3) 祭とお盆

ここで最後に生じてくるのが、なぜ盆という重要な宗教行事が行なわれる時期に、同様に特別な祭事である祭が行なわれるようになったのかという問いである。これに対して風戸の人々は一様に人足不足の問題をあげる。風戸ではすでに多く述べられているように、近年若者の流出に伴う高齢化が顕著である。また生業形態も変化し、いわゆるサラリーマンが増加し、区内に在住していても区の行事に積極的に参加できない人も増えている。このような状況では神輿やキリコの担ぎ手は高齢化し、いずれ確保できなくなるだろう。例えば「お勤めの人は祭やからって休めない」、「外に出ていった人も盆なら帰ってこれる」というのは区外在住者や勤め人が増え、祭に参加する人が減少したこのような状況を物語る。つまりこのような人が盆休みを利用して祭に参加できるように、祭の日付を変更したというのだ。

盆と祭が同時に行なわれることに対して、多くの人はそれぞれに見解を持っている。その中には今回の日付変更に関し肯定的なものも否定的なものもある。例えば「(祭と盆を同時にすることは) 盆と正月が一緒に来たようなもの」、「女性は祭の世話と盆の客の世話で忙しい」、「盆くらいはひっそりと過ごしたい」というのはよく聞かれるもので、特に女性の多忙を訴える人は多かった。壮年会としては「盆には嫁のほうの実家にも行きたいし、どこの地区も同時に祭っているのはおかしい」という一貫した意見を主張しているらしい。一方で子供や孫が区外に在住している人には「若い人が帰ってきて祭に活気が出るのはいい」、「(区外在住の) 子供や孫に祭を見せてやりたい」というような心情を持つ人が多いようだった。

しかし盆に帰省した人が人足として祭に参加するかということと必ずしもそうではない。例えば女性で高校を卒業してから祭に復帰する人は珍しく、区外から帰省しても、人が多く集まり、にぎやかな風無や富来の八朔祭を見物しに行くらしい。また男性でも区外で結婚し、子供も生まれると、人足として参加する人は少なくなるそうだ。つまり盆と祭を同時に行なうということが祭そのものの活性化には直接つながっていないといえる。また人足不足が問題としてあげられているが、現時点ではそれが祭の存続を揺るがすような危機的状況ではないことを加味すると、人足不足対策というのは表面的な理由だと考えられる。

それではこの日付変更で区民が望むものは何だろう。既述した祭の日付変更の町レベル、区レベルでの具体的経緯の中では、盆に移行することを前提として、日付に関する議論はされなかった。盆に変更すること自体なんらかの理由を持つとすれば、それはやはり「お盆なら、若い人が帰ってくる」ということだと思う。区としての祭人足の不足という問題の根本には、家族の中の成員の不在がある。

「呼んだり、呼ばれたり」というのは祭に親戚や世話になった人を招待して御馳走することで、「年に一度の無礼講」の日であった祭は正月と並んで欠かせないものであった。祭の当日には家族や親戚一同が集まって、御馳走を囲み、ともに祭に酔いしれる、そのような風景がどこでも見られた。祭の本来の姿を追えば、そこに家族の祭がある。しかし、祭をともに楽しみたい、祭を見せたいと思う子供や孫は都市へ移住し、なかなか帰省できない。風戸の住民はこの状況を意識せざるを得ない。何度も述べたように風戸は若者の流出、高齢化が進む過渡期におかれている。盆への日付変更が無理もなく許容されたのは、このような風戸の現況が反映された結果であると考えられる。

## V. 考 察

風戸の住民の祭に対する熱意はすごい。どこの聞き取りでも祭そのものや祭の日付に関して区民は問題意識を持って語っているようだった。本稿では祭の日付をお盆に変更したことに注目して、その理由がいかに語られているかを探ろうとした。表面的には富来の八朔祭の変更に

促されて、流されたように見受けられるが、調査をするうち、そこには住民自身の選択の結果としての日付変更、更にはひとびとの祭への姿勢が見えてくるようだった。

1997年の祭総会では祭の日付に関していくつか意見交換され、その中で「風戸の祭は風戸の祭、無礼講でいけばいい」というような意見が出された。このような発言は各戸での聞き取りでも耳にすることがあった。例えば、富来町中心部、八朔祭との関係において、「金魚のフン」のようだと言われることがあったり、学校側の対応を問題視したり、「無礼講」の問題にしても、「悪い慣習」として排除しようとする一方で、祭総会での発言のように、区としての祭の伝統そのものを指して言及する場合もある。このような動きから、区民の中に祭に関して自主性を重んじる傾向があり、またその自主性が侵されつつあることを懸念していると想定できる。

風戸はIVで述べたように、旧西海村の一部として存在していた。近隣の旧富来町や旧東増穂村との関係において、祭の日付変更の理由として挙げられたものは、富来町中心部との比較において説明できる。風戸の区の歴史から見ても、区の自主性、独自性の追求の傾向があったとも仮定できる。

それでは現在、問題視されている区の自主性、独自性に関しては、どのような状況があったのであろうか。IIIでも考察したが、女性の祭というイメージは行政や外部からの観光化という流れがあって形成され、また女性の祭参加を風戸独自のものとして再認識する誘因となったとした。このように、区の自主性や独自性を重視し、その維持を叫ぶようになった要因には、外部の社会の流れがある。それは既述した祭の観光資源化であったり、学校重視社会化である。様々な社会変化に対して、風戸の住民は「自主性、独自性」のものさしを持って対処しているようである。

そして最も大きな社会変化の要因となるのは区の高齢化、過疎化である。祭の観光資源化や学校重視社会化が外側からの要因だとしたら、区の高齢化、過疎化は区の内側で起こったものであるといえる。もちろん高齢化、過疎化を引き起こす高学歴社会や産業構造の変化、若年層の都市への流出はマクロな社会変化である。しかし、祭の変化をひきおこすうえで区民が現実問題として直面しているのは、区や家族の内側の要因であるといえる。盆への祭の日付変更は、「自主性、独自性」を基盤にした区としての祭、そしてなにより家族の祭を重視した結果であるように思う。

祭は風戸の区民にとって非常に重要な祭事である。そして、祭の日付変更が示唆するのは、風戸の現状であるし、またそれ以上に区民にとっての祭の意味である。風戸の祭はやがて来る本格的な高齢化への危機感から日付変更を迫られた。しかしそれは単に祭の継続や活性化を目標とせず、むしろ区民にとって祭で重要なのは、観光や伝統ではなく、家族で風戸区民であるというアイデンティティを祭を通して感じることであるように思われる。つまり風戸の祭は区としての祭であり、家族の祭なのである。

## VI. お わ り に

最後に祭の継承に関して聞いた若干の点をあげる。祭を風戸の伝統の象徴として継承すべきと捉える人は、比較的若い人の中にも多い。壮年会を引退したような年代の人は、かつて純粋な娯楽としての祭が印象に強いせいか、風紀の乱れや世代間での意識の差異には悲嘆するが、祭の継承に関しては楽観的な意見が多い。その点では、壮年会を代表する働き盛りの若い世代と言われるような人のほうが祭の運営、継承に懸念を抱いているようだった。彼らは風戸の高齢化、若年層の減少を身を持って体験しており、祭の運営の困難に直面している。彼らは風戸に残った数少ない若い世代であり、これからの風戸を支えていく世代である。彼らは祭を継承しなければならない伝統とはっきり認識していて、その点で祭を純粋な娯楽とする世代とは違う新しい価値観を持った世代である。例えば、現在の壮年会では祭唄を伝統として復活させようとする動きがある。これから10年後、彼らの子供が成人する頃、彼らはどのような目的意識を持って祭を継承していくのだろうか。

### 注

- 1) 1880年代初期北方遠洋漁業が盛んな頃、「西海村の五巨頭」（『富来町史・通史編』p473）と呼ばれ、大きな財を築いた旧西海村出身の人物のうち、松ヶ下神社の狛犬は貫氏、石碑は大庭氏の寄進である。
- 2) 「山」とは集落の北側に位置する林地のことで、化石燃料が利用される以前にはこの山から燃料を集めたという。イエ毎に不公平がないよう、お仲仕事として区総出で一挙に薪を集め、分配した。
- 3) ただし、かつては秋季大祭と呼ぶのが一般的で、1996年の9月11日から8月14日への日付変更に対応して、夏季大祭と呼ばれるようになったと思われる。
- 4) 1990、1991年にはそれぞれ1軒が御招待をしていることが確認された。
- 5) 祭万雑については15章を参照されたい。
- 6) 「ふるさと文化センター」1988年設立。伝承ホールには神輿、キリコ、鐘、太鼓、人足姿のマネキンが並ぶ。「町が推進する余暇・観光産業の中心をなす施設」（『広報とぎ』1998年5月No. 206より）である。その他1985年「能登リゾートエリア増穂浦」、1987年「世界一長いベンチ」、1991年「シネマチックロード」、1995年「厳門クリフパーク」、1996年「魚のいない水族館」などがある。
- 7) 区民が行政に頼らず、自らの負担で建設に踏み切った区の公民館建設の例や、1997年祭総会での自主性に関する意見などからうかがえる。
- 8) 1997年の祭総会については9章を参照されたい。
- 9) 女子高校生の祭の参加規制、許可制への移行に関しては15章を参照されたい。
- 10) 富来中学校の統合は1959年以降順次進められ、1984年に現在の場所に移転、富来町内の全ての中学校が完全に統合された（『富来町史・通史編』p593-595、富来中学校『十周年記念誌』より）。